

地域における読書活動を通したコミュニケーション能力の育成

長岡 絵里佳 (Erika NAGAOKA)

【目 的】

図書館司書には、利用者の質問に答えるレファレンスサービスをはじめ、本と人、人と人を結びつける役割が求められてきた。最近の公立図書館では、地域の課題解決やビジネス支援、サードプレイスなどの「場」の提供など、多様なサービスが展開されているため、司書はより一層多様な人々とかわり、ニーズを把握し、図書館の資源を駆使して対応することが求められている。さらに、学校図書館では、探究的な学習の支援や、情報リテラシーの育成など、司書の教育的な役割も重視されてきている。

こうした中、司書に求められる資質として、これまで以上にコミュニケーション能力が重要になっている。しかし、司書科目を学ぶ学生の多くは、「これからの司書はコミュニケーション能力が重要だ」ということが知識として理解できても、実感が伴っていないことが多い。また、現在鳥取短期大学（以下、本学）で開講されている司書科目は講義形式の授業が多く、司書に必要なコミュニケーション能力を育む機会が乏しい上、実際に地域の方や子どもたちとかわる機会はほとんどない。

そこで、学生自らが地域における読書活動を企画し実行することを通して、とくに司書をめざしている学生のコミュニケーション能力の育成を図ろうと試みた。司書資格の取得をめざす学生が多く所属している本学のサークル、図書館倶楽部（以下、倶楽部）に呼びかけ、11 月上旬に行われる北栄町図書館まつりにおいて、学生たちによる読書活動を実施することをめざした。学生が行う読書活動には、遊びやゲームの形で楽しみながら読む力を育む読書へのアニメーションの方法を取り入れた。

読書へのアニメーションは、アニマドール（活動のリーダー）を中心に、参加者がコミュニケーションをとりながら、本の理解を深めていく参加型のグループ活動である。学生がアニマドールに挑戦することによって、読み聞かせの技術を伸ばすだけでなく、子どもたちの読書の力を引き出すかわり方など、参加した地域の人々と交流する力も育まれると思われる。また、読書へのアニメーションは、小中学校など、子どもたちを対象とした活動で行われるようになってきているが、まだ知らない人もいようである。そのため、読書へのアニメーションを実施することは、地域の方々にとって、新たな読書活動の方法を知る機会となるだろう。

読書へのアニメーションは、国際文化交流学科 1 年前期の科目（平成 30 年度は国際文化交流学科 2 年前期も開講）「読書と豊かな人間性」等で取り上げられている。そこで、今回の学生たちの実践については、「読書と豊かな人間性」の担当教員であり、地域での活動実績も豊富な非常勤講師の倉光信一郎先生から指導・助言をいただいた。学生たちにとって、自ら試行錯誤して読書へのアニメーションの内容を充実させたり、読み聞かせや本の紹介を工夫したりする過程や、実際に読書活動を実施した成果を振り返ることは、授業だけでは得られない学びの機会となる。また、司書科目、学校司書科目の担当教員にとっても、養成すべき司書の資質・能力について改めて考える機会となり、今後の授業改善につながると思われる。

○共同研究者・協力者

倉光 信一郎（鳥取短期大学 非常勤講師）

図書館倶楽部の学生（鳥取短期大学国際文化交流学科 2 年生）
北栄町図書館

【活動（研究）の概要】

1. 図書館倶楽部と北栄町図書館まつり

図書館倶楽部は、1998 年に「図書館研究会」としてサークル活動がスタートした。結成当初は、「研究会」という名の通り、学生が授業外で学び、研究活動を行うという側面が強かったが、名称を「図書館倶楽部」に変え、より自由で活発なスタイルとなっていく¹⁾。倶楽部ではこれまで、本学附属図書館の書架整理や蔵書点検、倶楽部会報の発行、図書館に関する映画観賞会、本学の大学祭での古本交換市やビブリオバトル、倶楽部のブログの更新など多様な活動を行ってきた。国立国会図書館関西館や奈良県立図書情報館、天理図書館の見学と天理大学のライブラリー同好会の学生との交流を行ったり、鳥取市立図書館の郷土新聞データベースの充実²⁾に取り組んだりした年もあった。しかし近年、活動内容が多岐にわたる一方、部員数が少なくすべての活動を十分に実施できない年があったり、倶楽部の活動が「しなければならない」活動としてルーティン化し、学生の自主性が損なわれる傾向が見られたりするようになったため、数年前からは、これまで行ってきた活動を参考にし、取り組みたい内容を学生自身が決めるようになっている。昨年度（2017 年度）は、部員数が2名で、取り組んだ内容は、大学祭での古本交換市と北栄町図書館まつりのスタンプラリーだった。

北栄町図書館は、「名探偵コナン」の作者青山剛昌の出身地として有名な北栄町の由良駅（愛称はコナン駅）の近くにある北栄町図書館と北栄町図書館北条分室からなる。例年11月上旬頃に約2～3日間かけて図書館まつりを実施しており、開館20周年の2013年度は10月26日（土）から11月3日（日）の約1週間にわたって特別講座やシネマウィーク等を開催するなど、力をいれて取り組んでいる。

北栄町図書館まつりに参加するようになったのは、2014 年の6月頃、当時の倶楽部の部長が北栄町図書館を何度か利用していくうちに、司書の方と顔なじみになり、北栄町の図書館見学に来ないかと誘われたことがきっかけである。そこで、倶楽部のメンバーで見学に行ったところ、図書館まつりのことを紹介され、ぜひ何らかの形でかかわらないかと司書の方から提案があった。さっそく、倶楽部のメンバーで話し合い、「名探偵コナン」にちなんで、図書館内の設備や資料を題材にしたクイズを解いていく「図書館なぞときスタンプラリー」を考案し、実施することになった。それからも継続して北栄町図書館まつりに倶楽部が参加するようになり、スタンプラリーは毎年楽しみにされている方も多企画となっている（2016 年10月の鳥取県中部地震直後の図書館まつりでは、やむをえず中止になった）。担当の司書の方が変わっても、部長や倶楽部のメンバーが変わっても、関係が続いている。

今年度（2018 年度）は、倶楽部に約9名の学生が集まり、引き継いだ当初から、部長をはじめとするメンバーから何か読書活動をしたいという希望があった。そこで顧問が北栄町図書館まつりについて紹介し、まつりで読書活動を行ってみてはと提案したところ、ぜひやってみたいという声があがった。2018 年5月18日（金）に北栄町図書館を訪れ、11月3日の図書館まつりで読書活動を行うことを提案したところ、担当の司書の方も歓迎してくださり、今年度の北栄町図書館まつりでは、午前中にスタンプラリーを実施し、午後に約1時間の読書活動を実施することになった。

2. 読書活動の企画・準備

国際文化交流学科の専門科目「読書と豊かな人間性」では、受講者が読書へのアニメーションを実際に体験する。読書へのアニメーションには75の作戦があり、それぞれの作戦は、子どもたちの持つ潜在的な読む力を伸ばし、知性を育み、読書をより完全なものにしようといつづられている。授業では、『はなをくんくん』を用いた作戦26「ここだよ」や『おまえうまそうだな』を用いた作戦31「どうして？」などが紹介されている。たとえば、作戦26「ここだよ」は、幼児や小学校低学年向けの内容である。アニマドール（活動のリーダー）は、登場人物の多い絵本を選び、登場人物や物語に

出てきた物の紙人形を子どもたちに選んでもらい、絵本を読み聞かせる。子どもたちには、自分が選んだ紙人形の人物や物が出てきたら「ここだよ」と言ってもらう。この作戦を通して、子どもたちは、読み聞かせをよく聞こうとし、物語に出てくる人物や物の違いを理解し、理解したことを表現するようになっていく³⁾。このように、読書へのアニメーションの作戦にはそれぞれのねらいがあり、アニマドールは、こうした作戦をよく理解し、子どもたちの年齢や読書レベル、興味関心に応じて、適切な本と作戦を選び、声かけやかかわり方を工夫していくことが重要である。

今年度の倶楽部のメンバーは、ほとんどが国際文化交流学科2年生で、2年前期の科目として「読書と豊かな人間性」を履修した学生が多かった。授業で読書へのアニメーションを学んだ学生を中心に話し合い、北栄町図書館まつりでは、『はらぺこあおむし』を用いた作戦1「読みちがえた読み聞かせ」と『こんとあき』を用いた作戦2「これ、だれのもの？」を行うことになった。作戦1「読みちがえた読み聞かせ」は、幼児を対象とし、同じ物語を二度読んで聞かせ、二度目の読み聞かせでわざと間違えて読み、読み間違えたところを子どもたちに発見してもらう作戦である。アニマドールは、丁寧に読み聞かせをし、子どもたちが集中して物語を聞く環境をつくることが求められる。作戦2「これ、だれのもの？」も、幼い子ども向けで、さまざまな服や物の絵が描かれたカードを見せ、それがどの登場人物のものなのか当ててもらおう作戦である。アニマドールは、はっきりとわかりやすい絵を描き、子どもたちに回答をたずねていく自然なやり取りを展開させていくことが求められる。

企画段階では、ちょうど6月23日(土)に鳥取市のわらべ館で行われた「古宇田亮順さんのたのしいパネルシアター」に倶楽部のメンバー2名が参加したこともあり、ブラックパネルシアターに挑戦したいという声があがった。しかし、設備や機材の問題などから断念し、紙芝居を行うことになった。そして水曜日午後の時間帯に話し合いを重ね、最終的に、「ももたろう」の紙芝居と「ブレーメンの音楽隊」の紙芝居が選ばれた。

こうして、北栄町図書館まつりで行うアニメーションや紙芝居が決まっていたが、倶楽部のメンバーは、授業以外で読み聞かせを行った経験がほとんどなかった。そこで8月のオープンキャンパスで顧問が担当する授業体験に読書へのアニメーションを取り入れ、倶楽部のメンバー2名による『こんとあき』を用いた作戦2「これ、だれのもの？」を行った。また、10月の大学祭で、倶楽部と付属図書館共催によるビブリオバトルを行うことになったことを活用し、ビブリオバトルの投票を集計しているあいだに、紙芝居と読書へのアニメーションを実施することにした。

これらの実践にくわえ、倶楽部のメンバーは自分たちで練習しようと話し合ったが、メンバーの日程が合わず、本格的に取り組むはじめたのは9月下旬からだった。紙芝居やアニメーションの役割分担を決め、担当者で集まって個別練習を行った。10月10日(水)にはじめて教員も出席した全体練習を行ったが、通しリハーサルではなく、紙芝居とアニメーションのそれぞれの練習成果の確認にとどまった。しかし、「ブレーメンの音楽隊」の紙芝居では、担当者3名の息が合わないところや、声の小さいところなど具体的な課題が見つかった。『はらぺこあおむし』を用いたアニメーションでは、『はらぺこあおむし』の大型絵本の持ち方や持ち手2名と読み手1名の息の合わせ方にはじまり、導入部分の声かけや子どもたちから回答を受けたあとの反応の仕方など、工夫すべき点が多く見つかった。

10月17日(水)は、大学祭で実施する内容について通しリハーサルを行った。司会進行役の学生の声かけや、紙芝居からアニメーションへのつなぎの部分の確認、アニメーション終了後のまとめ部分の確認を行った。10月10日の反省を踏まえて、紙芝居は息が合うようになり、アニメーションもより自然なやり取りがみられるようになった。

大学祭終了後は、いよいよ北栄町図書館まつりに向けた準備である。大学祭の取り組みを踏まえて、約1時間の企画を再度練り直していった。このとき、学生たちから紙芝居「ももたろう」にちなんだ手遊びをいれたいという提案があり、顧問のほうからも「キャベツのなかから」の手遊びや簡単なブックトークを行ってはどうかという提案をした。実は今年、北栄町図書館は開館25周年で

あり、「25」という数字にちなんだ内容を取り入れてほしいという要望があがっていた。学生たちと話し合いながら、読み聞かせした絵本や紙芝居、ブックトークで本を紹介し、活動の最後に、「紹介した本は全部で何冊あったかな？」という質問に「25冊」と回答するクイズを行い、北栄町図書館25周年につなげようということになった。

これらの準備や確認を行い、10月24日（水）に北栄町図書館に伺って最後の通しリハーサルを実施した。通しリハーサルには、北栄町図書館から館長と担当の司書の方も見に来られた。はじめてアニメーションを体験するようで、学生たちの問いかけにも楽しく応じておられた。リハーサル後、読書へのアニメーションはどのようなものか最初に簡単な説明をしたほうがわかりやすいという意見や、作戦2「これ、だれのもの？」の絵本が見えにくいので工夫が必要という意見をいただいた。また、進行役を担う学生が、読み聞かせも担当していたため、一人の負担が大きいことも明らかになった。役割分担を見直し、最終的に参加することになった学生7名全員が読み聞かせやアニマドール、ブックトークの紹介など何らかの形で、人前で声を出す役割を担うことになった。

以上の準備にくわえて、11月3日（土）午前中に行う「図書館なぞときスタンプラリー」の準備も同時並行で行った。倶楽部のメンバーで話し合い、スタンプラリーの問題用紙を考え、「第2問、北栄町のブランド品で有名な、大玉すいかはなんでしょう？」や「第4問、北栄町の今の町長さんはだれでしょう？」など、図書館の資料を使って答えられ、かつ、北栄町にかかわるような内容の計5問のクイズを作成した。スタンプラリーのクイズはそれぞれ、図書館内で番号札を下げた学生たちを探して回答し、正解するとスタンプをもらい、5つのスタンプを集めていく形式である。番号札を下げた学生たちは、それぞれの番号の問題についてヒントとなる資料を提供しながら、回答を促していくような工夫を考えた。また、スタンプラリーの受付兼ゴールを図書館の入り口に設け、担当する学生は、来館者にスタンプラリーを呼びかけたり、スタンプラリーのルールの説明をしたり、ゴールしたあとの対応がスムーズにいくように準備を行った。

3. 大学祭での実践

大学祭一日目の10月20日（土）10時から付属図書館本館にて、「話して聞いて楽しもう！！～ビブリオバトル&アニメーション～」と題してイベントを行った。ビブリオバトルは、誰でもできる本の紹介コミュニケーションゲームで、知的書評合戦ともいわれる。本のすばらしさを書評で競うことによって、読書が促されるだけでなく、他者を通じて本と出会い、その本を通じて他者の考え方を知ることができ、コミュニケーションを深めることもできる。本学では、司書科目の授業などで実施しており、倶楽部の活動として取り組んだこともある。昨年2017年から、全国大学ビブリオバトルの鳥取地区決戦が鳥取県大学図書館等協議会主催で行われており、本学からも予選会で選ばれたバトラーが出場している。今年はこの大学祭で実施したビブリオバトルが予選会にあたり、チャンプ本を獲得したバトラーが鳥取地区決戦に出場することになった。

倶楽部のメンバーは、当日までの広報や出場者の呼びかけ、会場設営に加えて、全体の司会進行、ビブリオバトルの投票用紙の配布と集計、質疑応答への積極的な参加、そして紙芝居とアニメーションを実施した。メンバーのなかからビブリオバトルのバトラーとして出場した学生もいたため、図書館倶楽部のメンバーは様々な形でイベントにかかわることになった。イベントは、最初にビブリオバトルのルール説明をした後、5名のバトラーによるビブリオバトルを行い、集計作業を行うあいだ、「ブレーメンの音楽隊」の紙芝居と『はらぺこあおむし』を用いた読書へのアニメーション作戦1「読みちがえた読み聞かせ」を行った。最後に表彰式を行い、チャンプ本獲得者から感想と次戦に向けての意気込みが語られた。

学生たちの役割分担やお互いの協力体制がうまくいき、イベントはスムーズに進行した。会場には、付属図書館職員3名、倶楽部のメンバー7名（バトラー以外）、バトラー5名のほか、学内外から約8名の来場者が訪れた（途中の入退場含む）。来場者は高校生以上の方ばかりだったが、紙芝居やアニメーションを楽しんでいた。「読みちがえた読み聞かせ」では、読み間違えたところを来場者が

すぐに回答してくれるか心配していたが、丁寧に読み聞かせたおかげか、どんどん手が挙がり、なごやかな雰囲気で行われた。

学生たちは、司会進行をつとめた学生を筆頭に、当初とても緊張していたようだが、来場者が楽しんで集中して聞いてくれる姿をみて、次第にリラックスして取り組めたようである。来場してくれた学生からも「楽しかった」「よかった」というコメントがあり、付属図書館職員からも「面白かった」「読み聞かせが上手だった」などイベントの成功を喜ぶコメントがあった。北栄町図書館まつりに向けて、人前での読み聞かせを経験し、イベントの進行をつとめたことは自信になったといえるだろう。

4. 北栄町図書館まつりでの実践

2018年の北栄町図書館まつりは、11月3日（土）と4日（日）の2日間行われた。倶楽部が担当したのは、一日目の11月3日（土）10時30分から12時までの「図書館なぞときスタンプラリー」と、同日午後2時から3時までの「絵本からワクワクドキドキ感じよう アニマシオン&紙しばい」である。

図書館なぞときスタンプラリーは、図書館まつりのオープニングセレモニー終了後からすぐに始められる方がいるほど盛況で、2～3歳の子どもから60歳以上の方まで45名の方が参加された。学生たちは、最初は戸惑いながら対応していたが、次第に準備してきたことを活かしてスムーズな対応ができるようになったようである。お昼頃には、他の町内のイベントに参加されていた町長が足を運ばれ、スタンプラリーの問題にご自身が登場することを見て驚かれるという一幕もあった。スタンプラリーを終えた方には、ゴールで景品をわたし、午後の「アニマシオン&紙しばい」のチラシを配布して案内した。

「絵本からワクワクドキドキ感じよう アニマシオン&紙しばい」は以下の流れで実施した。

- ① あいさつ
- ② 紙芝居「ブレーメンの音楽隊」
- ③ 「ブレーメンの音楽隊」についてのブックトーク
- ④ 手遊び「ももたろう」
- ⑤ 紙芝居「ももたろう」
- ⑥ 「ももたろう」についてのブックトーク
- ⑦ 手遊び「キャベツのなかから」
- ⑧ 読書へのアニマシオン 作戦1「読みちがえた読み聞かせ」（『はらぺこあおむし』）
- ⑨ 『はらぺこあおむし』の作者、エリック・カールについてのブックトーク
- ⑩ 読書へのアニマシオン 作戦2「これ、だれのもの？」（『こんとあき』）
- ⑪ 『こんとあき』の作者、林明子についてのブックトーク
- ⑫ まとめ（クイズ）

全体の進行役は1名の学生がつとめ、あいさつとまとめも担当した。この学生は、アニマシオンや手遊びなども担当したため、企画の大部分を担う形になったが、楽しんで取り組んでいる様子が伝わってきた。紙芝居は「ブレーメンの音楽隊」も「ももたろう」も3名の学生が役割分担して行った。3名のなかには人前で発表することが苦手な学生もいたが、仲間の後押しもあってか堂々とした読み聞かせができた。手遊びでは、進行役が見本を示し、他のメンバー全員がフォローした。読書へのアニマシオンはそれぞれ1名の学生が担当していたが、10月24日のリハーサル後に絵本の読み聞かせの担当とその後のアニマシオン担当に分けて行うことになった。それぞれの絵本の読み聞かせ担当になった2名は人前で発表することが苦手な学生だったが、限られた時間の中で自主練習を行い、当日はゆっくり、はっきりとした口調で読み聞かせを行うことができた。③⑥⑨⑪のブックトークは1名の学生が担当した。ブックトークの内容が決めきれずに直前まで悩んでいたが、

他のメンバーの手助けもあり、絵本のポイントが簡潔にわかるブックトークを行うことができ、最後のまとめにうまくつなげることができた。

来場者は、途中で帰られたり、途中から参加されたりした方も含めて、0歳児から小学生までの子どもが8名、大人が9名だった。イベント開始時は来場者がとても少なく、北栄町図書館の司書の方も心配されていたが、来場した方みんなが盛り上がる楽しいイベントとなった。会場に来られていた倉光先生から「前回見たときよりもレベルアップしていてとても上手にやっていた」「笑顔と明るい話し方がよく、参加者の気持ちをなごませていた」「今回の一時間の内容は、合間に入れた手遊び歌や本の紹介もよく、細かいところまでよく考えられていた」等のコメントをいただいた。さらに、「学生みなさんがチームとしてまとまった結果が大成功につながったのだと思う」と言われ、学生たちが皆で協力し、話し合いながら、活動をつくりあげたことに感心しておられた。北栄町図書館の方からも「絵本に興味を持ってもらうための、入り口、きっかけとして良い取り組みだと思う」「図書館として実施するなら、図書館まつりなどのイベントの時の方が良い」という感想があった。

5. 振り返り

11月14日（水）、北栄町図書館まつりについてメンバー全員で振り返りを行い、良かった点と悪かった点、改善点について、準備と当日にわけて整理した。以下のような内容である。

良かった点	悪かった点	改善点
(準備) ・声をかけたらメンバー皆が集まった ・話し合いで改善することができた ・大学祭で実際に経験することができた	(準備) ・練習量に差があった ・一人に任せすぎた ・本番前の練習が不十分だった ・取り掛かりが遅かった	(準備) ・計画をもって練習する ・全員が流れを確認する ・立ち位置を確認する ・本を置く場所を確認する
(当日) ・忘れ物をしなかった ・最後まで笑顔でできた ・楽しめてもらえた ・時間いっぱいやることができた ・上手にヒントが出せた	(当日) ・来館者への呼びかけ（案内）が足りなかった ・少しあたふたしたところがあった ・読み聞かせのタイミングがずれた ・準備がスムーズではなかった ・スタンプラリー時に、午後のチラシ配布を忘れてしまったことがあった	(当日) ・自分が担当していないときも参加する ・会場を確認する ・図書館の方と確認を念入りに ・スタンプラリー時は、受付担当以外もチラシ配布を担当する

さらに、個別に振り返りシートを記入してもらったところ、以下のような気づきがみられた。

1) スタンプラリーについて

- ・笑顔で接することと、フレンドリーな態度で参加者と会話することを心がけた。
- ・クイズに正解した参加者に「おめでとうございます」や「素晴らしいですね」など一言そえてスタンプを押すように工夫した。
- ・参加者には楽しんでもらえていたし、正解したときは嬉しそうな顔をしていたのでよかった。子どもだけでなく、大人も楽しむことができるスタンプラリーになった。

- ・クイズの問題が好評で「よく考えておられますね」と言われた。
- ・受付の説明が悪かったのか、「これは？」と聞かれることがあったため、もう少しわかりやすい説明をこころがけたい。
- ・幼い子どもへのヒントの出し方に悩んだ。
- ・番号札が見えにくく、参加者にスタンプの場所が分かりづらい時があった。
- ・自分が立っている場所が、図書館利用者の邪魔になってしまった時があった。

2) アニメーション&紙芝居について

- ・ブックトークでは、本の違いをなるべく強調し、参加者に質問して反応を見ながら進めた。
- ・声の大きさ、読むスピードを意識し、場面を想像しながら声の使い分けや抑揚も注意した。
- ・紙芝居の声の大きさや配役も事前に決めたくさん練習してきたので、うまくいったと思う。
- ・絵本の読み聞かせを担当することになってから本番まで時間がなかったが、かまずに読めた。読むのに精一杯で、お客さんのほうをよく見るができなかった点が反省。
- ・参加者の様子や顔の表情を見ながらやることができ、一緒に楽しんで最後までできた。
- ・一時間をしっかりと使い切り、たいくつしないような流れになった。練習と本番で変更したところも、みんなが合わせてくれたのでよかった。
- ・最後のほうで、子どもたちの集中力がなくなってきたようだった。どう対応するか焦った。

3) 全体を通して成長したと思うこと、変わったと思うことなど

- ・今までは人前で大きな声を出すのは苦手でしたが、紙芝居をして、読むのが楽しいと思えるようになった。
- ・紙芝居の役になりきるのは恥ずかしいと思っていたが、練習していくうちに変わっていった。
- ・子どもたちが楽しかったと言ってくれたときはやりがいを感じた。
- ・イベントでは参加者とのやりとりが大切だとわかった。クイズや手遊びなど、自分がしっかりしなければならなかったと思っていたが、参加者が答えてくれたり、一緒にやってくれたり、一緒に楽しむことが大切だとわかった。
- ・参加者とコミュニケーションをとることで、相手の緊張もほぐれ、充実した時間を過ごせることがわかった。
- ・ゼロから皆で考えるというのは大変だけど、とても充実した期間だった。仲間で考え、協力して一つのことをやりとげるといのは、貴重な経験になった。
- ・みんなの時間が合わず全員で練習する時間は少なかったが、一人一人が少ない時間の中でがんばって練習したので本番うまくいったと思う。流れが把握できていない人がいたのが反省点。
- ・人とのやりとりを積極的にやってみようと思うようになった。

【考 察】

今回の取り組みを振り返り、学生たちのコメントをみると、さまざまな点でコミュニケーション能力の向上がみられた。

まず、「人との接し方」である。スタンプラリーや読書へのアニメーションなど、ヒントを出したり、正解したときに反応したり、自然なやりとりで参加者の笑顔が引き出せるように、学生たちは細かいところまで気配りができるようになった。そもそも人と接することが得意ではない学生もいたが、笑顔を忘れず、親切な態度で接するように意識するようになった。

次に、「人前での発表」である。人前ではどうしても緊張してしまう学生もいたが、絵本や紙芝居の力もあり、自分も楽しみながら人前で堂々と声を出すことができたことは大きなきっかけとなっただろう。また、自分がすることだけに精一杯な姿勢から、相手の様子をみて、相手と一緒に楽し

もうという姿勢がめばえた点も大きな成長である。

「人への伝え方」も重要である。間違えずに読もうという姿勢から、物語の登場人物になりきって、恥ずかしがらずに感情をこめて読もうという意識がでたのは、物語をもっと伝えたいという気持ちの表れである。絵本の持ち方や見せ方、ページをめくる速度などの動作も含めて、どうしたら上手くつたえることができるのか工夫しようという意識が、学生自身に見られるようになった。

今回のような企画をつくる力や発想力も磨かれたようである。とくに、机上で企画を考えるだけにとどまらず、実際にやりながら修正していく試行錯誤の過程を経ていくことができたこともまたとない経験になっただろう。学生たちのなかには、新しいことや不慣れなことに取り組むことに不安を感じて消極的になる人もいたが、今回の取り組みを通じて、「積極性」が増したように思われる。

そして、これらの成長を促したのは、学生たちの「チームワーク」である。北栄町図書館まつりでの活動を成功させようと、メンバー全員が一丸となって協力し合い、支えあいながら、準備をすすめることができたため、本番当日も大きなトラブルなく落ち着いて対応することができたのだろう。今回の取り組みで、教員は適宜アイデアを出したり、声の出し方やスピードなど具体的なアドバイスをしたりしたもの、最後に決断して準備をすすめるのは学生に任せていた。細かいところまで行き届いた準備をするのは一人では難しい。今回参加した学生たちはもともと仲の良い学生同士だったが、同じ目標をもって、話し合い、ともに一つのカタチを作り上げていくことの面白さや達成感に気づき、一回り成長したように思える。

北栄町図書館まつり後も、倶楽部のメンバーのなかから、全国高等学校ビブリオバトルの鳥取県大会に運営スタッフとしてかわる学生も出るなど、学んだことを活かす姿がみられた。一方で、人前で絵本や紙芝居を上手に読めても、自分で考えた原稿などを伝えようとすると緊張が増してしまふ学生の姿や、明確な目標のもと仲間と協力し合い、支えあう環境からはなれ、自分ひとりで考え決断しなければならない状況になると、うまく力を発揮できない学生の姿もみられた。学んだことを別の場面にどのように活かしていくのが今後の課題である。

このように振り返ると、今回のような読書活動で必要とされるコミュニケーション能力は、多面的で重なり合っているように感じられた。こうしたコミュニケーション能力を具体的に学生に示していくことができれば、めざす司書像がより明確になると思われる。しかし、司書に必要なコミュニケーション能力を考えると、読書活動以外の業務もあるため、より多岐にわたる。うわべだけの形式的な受け答えだけでは済まない状況も多く、豊富な知識や経験が求められることも多い。まずは、大学で学ぶべき司書としての基礎は何かという点から、検討をはじめていきたい。

また、今回の取り組みをすすめるなかで、司書科目や学校司書科目にも取り入れられないか検討を試みた。しかし、上記で述べたような学生の成長は、学生自身が主体的に取り組むなかで育まれたところが強い。教員側から今回の機会を提供したが、そもそも学生自身に「やってみたい」という気持ちがあった。これは、大学の授業のなかでは得難い要素である。そのため、司書の授業にすぐにそのまま取り入れるのではなく、まずは学生たちの主体性を発揮できる環境や仕掛けづくりを考えていきたい。

《注・参考文献》

- 1) 長岡絵里佳 (2013) 「主体的な学びをはぐくむ図書館学教育の可能性：鳥取短期大学『図書館倶楽部』の活動を通して」『図書館学』102号、pp. 19-26。
- 2) 長岡絵里佳 (2014) 「明治・大正・昭和期の鳥取県に関する郷土新聞データベースの充実」『平成25(2013)年度研究報告書：大学人における「地域人」の育成』鳥取短期大学地域交流センター、2014年、pp. 30-31。長岡絵里佳 (2015) 「郷土新聞データベースの充実化を通じた図書館情報学教育の可能性」『平成26(2014)年度研究報告書：「地方創生」と大学』鳥取短期大学地域交流センター、2015年、pp. 34-35。
- 3) サルト、M・M、宇野和美訳 (2001) 『読書へのアニマシオン：75の作戦』柏書房。